



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 331号 2011.4.10 発行 社会政策研究所

グループホーム学会のメールで松友了さんから報告が届きました。そのまま掲載します。

【kobi】

関係各位

いつもお世話になっております。このたびの「東日本大震災」の支援に関し、個人的ではありますが、ささやかな活動を行って参りました。ご協力いただいた方への感謝の意をこめて、稚拙ですが報告書を作成しました。ご指導と連携をお願いしたく、ここにお送りいたします

2011年4月8日

東日本大震災・現地支援活動の報告

社会福祉士事務所・早稲田すばいく 社会福祉士／保護司 松友 了

はじめに

このたび、東日本大震災に被災された方々の支援を探るため、個人的な立場で現地（岩手県陸前高田市）へ赴きました。ここに報告を行い、私たちなりの分析と提案をいたします。

地震が発生して以来、私たちはテレビ等の報道に接しながら、無力な自分を責める毎日でした。16年前の阪神淡路大震災の折は、5日目から現地へ入り、組織を挙げて支援活動に取り組むことが出来ました。しかし、今回はさまざまな面で様相が異なり、動き出すことができませんでした。

その後、現地にて支援活動を進めるチームの要請を受け、主に障害分野での支援のために、「早稲田すばいく」として私と小林良子（社会福祉士・精神保健福祉士／保護司）は、その地に入ることが出来ました。そして、今後の支援活動の展開のために、ここにその報告を行います。

しかしながら、この報告書はあくまでも個人的な立場から、限定された地区の、限られた日程（5泊6日）の活動を基にしています。そのため、客観性と普遍性があるとは言い難く、あくまでも一つの資料として受け止めていただきたく願います。

●現地へ赴くまでの経緯

阪神淡路大震災の時と異なる点の一つは、私たちの立場にあります。当時は、（社）日本てんかん協会という全国組織の責任ある立場にありましたので、その組織の上に立って動きました。今回は、寄って立つ全国組織がないため、どのような立場で関与するか思索し、初動が遅れた感があります。

地震が起きた時、小林は事務所で職務中でした。激しい揺れで木製の本棚が壊れる様子を目撃し、交通機関の全面停止により事務所に足止めを食らい、翌朝に帰宅することを強いられました。松友は、国分寺分区の保護司会の役員会の最中であり、自宅へはタクシーで帰宅することが出来ました。その後、テレビ等で被害の甚大さを知ることになります。

その後、小林は（社）日本てんかん協会東京都支部の事務局長の立場から、主にてんかんに関する支援の状況を把握し、対応を模索しました。松友は、各種のML等で情報を収集す

ると共に、個別的な引き受け（ホームステイ）を提案し、朝日新聞が紹介したその調整団体であるNPO法人アースデイマネー・アソシエーション (<http://www.earthdaymoney.org/>)へ登録しました。

東京での引き受け（支援）を模索しながら、現地へ赴く方策を模索しました。そこで、先に現地で活動する「チーム福井」の後藤勇一氏（福井市議・小林の実弟）から、障害分野が手薄であり専門家の協力が必要との連絡を受け、急遽、その地（陸前高田市）へ出向くことになりました。後藤氏は、これまでの災害ボランティアの経験から早々に現地に入り、情報を各地へ発信していました。

職務上の必要な会議、すなわち（社）日本てんかん協会東京都支部の世話人会（役員会）と（社）東京社会福祉士会の総会（共に、3月27日）に参加し、翌日に出発する計画を立てました。なお、総会の後に（社）東京社会福祉士会は「災害対応打合せ会」を開催し、ボランティアMLの立ち上げ等を確認しましたので、その後の活動に見通しと連続性を得ることが出来ました。

●現地での具体的な活動

活動期間は、3月28日（月）～4月2日（金）の5泊6日です。移動手段はすべてバスでした。「東京駅前―盛岡駅前」は7時間（料金／片道：7,300円）であり、「盛岡駅前―陸前高田ドライビングスクール」は2時間30分（料金／片道：2,700円）でした。前者は事前予約を行いましたが、後者は当日に並ぶという形式でしたが、双方ともに車内は座席に余裕があり、意外な感がしました。

3月28日と4月1日の夜は盛岡駅近くのホテルに滞在し、3月29日～31日の3泊は陸前高田市の普門寺という曹洞宗の古寺の別院にて、「チーム福井」に依存する形で宿泊しました。ホテルは高層部が閉鎖されていましたが他にはほとんど影響はなく、4月を境に平常営業になり料金も下がりました。普門寺では水道や電気、携帯電話も利用できましたが、メールが送受信できませんでした。

災害支援の鉄則として、生活必需品は持参することになります。厳しい寒さが予想されましたので、総量は大型＋小型リュック＋PCとかなりの量になりました。水類やレトルト食品類が重く、シュラフ（寝袋）や衣類等が幅を取りましたが、お陰で不足品はありませんでした。流通が回復しておらず、現地での購入は不可能ですから、使用予想の品々をすべて持参したことは正解でした。

初日（28日）は、東京駅八重洲南口（09:00）―盛岡駅前（16:00）の高速バスで盛岡に向いました。東北高速道路は自衛隊や警察車両、救援車がほとんどで、通行制限は解除されていましたが、今まで経験したことのない閑散として状況で、きわめてスムーズに運行しました。パーキングエリアや給油所もほぼ正常に営業しており、晴天と相まって複雑な気持ちになりました。県庁所在地である盛岡市は、余震や生活物資の不便さ等を除くと、表面的には普段と変わらない様子でした。

盛岡では、ホテルのレストラン（営業休止中）にて、18:00から2時間、地元の知的障害分野の専門家とお会いし、説明と助言を受けました。彼女は知的障害のある若い女性の母親であると共に、県からの委託を受けて長らく「障害者人権110番」の相談員を務めています。松友がかつて常務理事を務めた（福）全日本手をつなぐ育成会で、長らく委員をお務めいただきました。

仕事の関係で、県内の組織と個人の状況に詳しく、翌日からの現地での活動にじつに有意義でした。特に、「被災者は現地を離れたがらない」という説明は、納得のいくものでした。被災地の歴史的文化的な背景、それゆえの地域の強い繋がりが、現地での復興を希望しています。また、言葉の違い（分かり難さ）が、大きな要因の一つとお聞きし、支援の奥深さを理解することが出来ました。

2日目（29日）は、盛岡駅前（08:30）―陸前高田ドライビングスクール（11:00）のバスで現地へ向かいました。終点の近くに「災害ボランティアセンター（災害VC）」が社会福祉協議会を中心に設置されており、私たちはそこに向かいました。毎日、朝夕2回、ここを拠点に動く関係者が報告・打ち合わせ会を行います。市の社協に加え、全社協の要請で福井

県と新潟県の社協が駆け付けていました。岩手県立大学の学生が中心になり、一般のボランティアの受け付けを行っていました。

ここで、後藤氏と待ち合わせ、氏が福井から運んできた軽トラックの荷台に乗り、避難所に向かいました。市内へ向かうバスの中で、並行する川のかなり上流まで瓦礫が流れ着いていることに衝撃を受けましたが、車で通る平地の市街地跡の惨状は、言葉を失うものでした。わずかな鉄筋コンクリートのビルは外壁のみが残り、木造の建物は跡かたもなく流され、瓦礫となって高台に打ち上げられています。更地のようなになった地面を歩く人はほとんどなく、砂漠のような光景です。

瓦礫の中に、車や船まで巻き込まれ、自衛隊や警察官が不明者の捜査に当たっています。最大の人的被害を出した陸前高田市では、1,000名を超す死亡者とそれ以上の数の不明者がいます。現在は、不明者の捜査に全力が尽くされ、瓦礫の撤去には全く着手できない状況です。毎日、数十人規模の遺体が発見され、その都度、関係者の周りには深い悲しみが包みましました。

2か所の避難所を訪問しました。最大の避難所の高田第一中学校は、一時は1,800人が避難していたとのことで、この日の時点では800人を超す人が暮らしていました。自衛隊の支援とボランティア、そして避難者自身の力により運営が図られています。しかし、広い体育館で生活する姿は、その苛酷さを一瞬にして理解できる光景でした。ここには、東京都の「こころのケアチーム」が派遣されており、「てんかん」の担当部局であるため、職員に挨拶し情報を交換することが出来ました。

高田第一中学校には、さまざまな支援が入っています。内装が木造という、本当に素敵な2階建ての校舎であり、支援組織が各教室に配置され、運動場ではすでに仮設住宅の建設が始まっています。酷い被害であったため、自衛隊をはじめ強力な組織的な支援が入ったものと思われまします。しかし、次の広田中学校の避難所は、まだ十分な支援が入っているとは言い難いものがあります。

「災害VC」に戻り、夕刻の打合せ会に出席しました。全体状況の報告と共に、障害分野の取り組みについての糸口が見つかり、明日の対応を協議しました。その中で、父を亡くした母子への支援、という具体的な要請が「チーム福井」から入り、居住地の確認等がなされました。とにかく、行政機能もズタズタで、私たちも外部から入ったため、状況の把握がきわめて困難をきわめました。

夕闇と共に活動は終了し、「チーム福井」の滞在する古寺に向かいました。そこで、情報と意見の交換を重ね、被害の全体像を掴むと共に支援の方向性を検討しました。「チーム福井」は、県議等の災害ボランティア活動の経験者と県の組織的な部分の混在チームであり、他の県に先んじて県民のボランティアを募集し、マイクロバスで組織的な派遣を行っていました。かつてのタンカー座礁事件での重油流出への対応の経験があるとはいえ、素晴らしい対応の速さと称賛できます。

3日目(30日)は、08:30の「災害VC」での打合せの後、**あすなるホーム**(社会福祉法人燦々会)へ向かいました。固定電話は不通で、携帯電話の番号が不明のため、直接出向くしかありません。後藤氏の軽トラックの荷台に乗り込み、冷たい風を避けながら向かいました。地元の人が車で先導してくださったため、前日はどうしてもたどり着けなかった場所に簡単に到着しました。

「あすなるホーム」は、知的障害者の「親の会」が母体で始めた、日中活動支援事業(就労移行支援・就労継続支援B型事業所)です。古い制度では、通所授産施設と呼ばれた事業です。施設長の西條一恵さんは、元学校教師であり、障害のある青年の母親です。自宅に青年を残し、利用者の支援と事業の再開に奔走されていました。

この「あすなるホーム」との出会いが、その後の障害分野の繋がりへの糸口になりました。利用者の多くが被災し避難所にいるが、他の人との関係が上手く取れずストレスが溜まっていること。そのため、一日も早く活動を再開し、日中だけでも安定した場を提供したい、昼食も出したい、等々のニーズが出されました。この場所に避難し、寝泊りしている人もいました。

そこですぐに、私がかつて理事長を務めていた、国分寺の「親の会」が設立した社会福祉

法人けやきの杜の大竹眞澄園長と、ユニークで活発な支援の実績を重ねてきた社団法人精神発達障害指導教育協会の湯汲英史常務理事に、その場で携帯電話により、「あすなるホーム」へのピンポイントの支援を要請しました。両者は即断即決で快く承諾してくれました。そして、NPO 法人東京都発達障害支援協会の先発隊として気仙沼にいた大竹園長は、その日の夕刻に多くの物資と共に駆け付けくれました。また湯汲常務理事は、31日の夜に東京から車を走らせ、1日の早朝に多額の義援金を持参して馳せ参じてくれました。両者の素早い対応に、心から感謝し賞賛したいと思います。

今後は、「あすなるホーム」を重点的に支援し、そこを出発点として他の事業所へ広げて行く、という戦略を立てました。すでに、予定の4日(月)から事業が開始され、「避難所」としての指定を受けることが出来た結果、自衛隊の炊き出しの支援が始まったとのこと。これらの手配は、「チーム福井」の後藤氏のご尽力によるものです。連絡先は次の通りです。

あすなるホーム(社会福祉法人燦々会)

〒029-2205 岩手県陸前高田市高田町字東和野 37-1

E-mail : sun2-asunaro@clock.ocn.ne.jp

携帯 : 090(4555)3448 TEL/FAX : 0192(55)2978 (現在は不通です)

西條施設長とお話ししているところに、社会福祉法人大洋会の青松館(就労継続支援B型)の中村浩行館長が偶然に顔を出され、さまざま情報を得ることが出来ました。特に、地域で生活する障害者の苦労を具体的にお聞きし、中村館長への支援の必要性を感じました。しかしながら、連絡を取った二人の指導的な立場の人は、全体的な動きを検討中であり、直接的な連携・支援を創り上げることができませんでした。なお、この法人は、次の日に訪れる大船渡市に多数の事業所を持ち、この地域での幅広い事業を展開している組織です。翌日案内をして下さった近江氏の所属する法人と共に、これら3法人がこの地区のほとんどの事業を担っていることが分かりました。

西條施設長と中村館長と別れ、仮設事務所にある市の社会福祉課へ向かいました。市の障害福祉担当者は、身体障害担当の佐々木氏を除き、知的障害と精神障害のそれぞれの担当者二人は、津波の犠牲になられています。そのため、若い佐々木氏はお一人で文字通り忙殺されていました。昨日からの動きを報告し、今後の支援への助言を求めました。すると氏は、**ひかみの園**(知的障害者入所更生施設/社会福祉法人愛育会)への支援の必要性を強調されました。

高台にある「ひかみの園」は被害もなく、平穏な生活が保たれていましたが、流失したグループホームの利用者等が加わり、かなりの過剰人員の状態とのこと。また、グループホームの再建のための助力、特に財政的な公的支援を、園長は訴えられました。入所施設の役割と地域移行の支援の意味を、未曾有の事態に直面しながら考えることが出来ました。

前日に、個別支援の要請を受けた親子を尋ねましたが、山間の一軒家には不在でお会いすることができませんでした。そのため、要請された公民館長を訪ねると、実家に戻られたのではないかということです。公民館は避難所になっており、先の親子の親族としての結びつきと共に、地域の繋がりの強さを実感できました。そのため、親族や地域の力への期待が持てると共に、「この地を離れたくない」という、盛岡での助言を思い出しました。また、きわめて高い「少子高齢化」の実態を、まざまざと知ることが出来ました。

「災害VC」の夕方の打合せ会にて、本日の活動報告を行った所、市社協の大坂富夫事務局長代理より、この地の障害者分野のキーパーソンを紹介され、連絡を取るよう携帯電話の番号をご教授いただきました。社会福祉法人愛育会のチャレンジドまちかど相談室“リンク”の相談支援専門員(コーディネーター)の近江雅喜氏です。携帯電話で、明日の「災害VC」での朝の打合せ会でお会いすることを約束し、その日の活動は終了しました。

4日目(31日)は、「災害VC」の朝の打合せ会で近江氏に会い、この地区の全体像の説明を受けることが出来ました。陸前高田市と大船渡市、住田町の2市1町は、一つの「広域福祉圏」を形成し、一体となって支援を行っている、ということでした。そのため、そこに属する事業所を、一通りご案内いただくことになりました。以下に、訪問先の一覧をお示しします。

社会福祉法人愛育会

作業所 きらり（就労継続B型事業所・陸前高田市・伊藤勇一所長）

社会福祉法人大洋会

慈愛福祉学園デイサービスセンター（生活介護事業・大船渡市・朝倉紀宏所長）

慈愛福祉学園（就労継続支援B型事業所・大船渡市・吉田幸弥園長／法人常務理事）

岩手県立福祉の里センター（指定管理・大船渡市・戸羽幸枝所長、平子良係長）

障がい者・児童相談支援センター／地域活動支援センター星雲（大船渡市・佐藤直人所長）

岩手県立気仙光陵支援学校（大船渡市・千葉智子進路担当教諭）

これらの事業所の訪問で分かったことは、この地区（広域福祉圏）における実践と連携の素晴らしさ、所長等の中堅の専門職の優秀さでした。多くの方が、家屋や家族が被災しており、その心痛を抱えながらの取り組みです。そもそも岩手県は、地域生活支援の実践が素晴らしい所でしたが、この地区は特にその感を強く認識しました。それゆえに、今回の「大震災」の影響を出来るだけ少なくする支援が必要だ、と思いました。地域生活を本気で目指した私たちは、このような時こそその真価が問われるといえます。

陸前（気仙）地区の支援は、「あすなるホーム」へのピンポイントの対応を基本に置きながら、広域的に連携した支援を行う必要性を感じます。その意味で、近江雅喜氏はコーディネーターとして適任者であり、彼を窓口地域ニーズと外部からの支援の調整を行う方式にたどり着きました。連絡先は、以下の通りです。

近江 雅喜（おうみ まさき）

チャレンジドまちかど相談室“リンク”（社会福祉法人愛育会）

〒029-2205 陸前高田市高田町字館の沖 62

携帯：090(9030)7067 TEL/FAX：0192(55)6255（現在は不通です）

E-mail：sien@estate.ocn.ne.jp

5日目（4月1日）は、支援活動の総括を兼ねて、「災害VC」での朝の打合せの後、再度、「作業所 きらり」と「あすなるホーム」を尋ねました。そこでの、作業製品を購入するためです。前者では、梅干を購入し、後者（あすなるホーム）ではヤーコンの加工製品を購入しました。この南米産の植物ヤーコンは、栽培が簡単ということで高齢者の多い地元の農家が栽培し、お茶や乾燥レモン煮などの製品に加工したもので、血糖値を抑える等の効果があるそうです。福井生協では、震災支援の一環として、組織的に販売する計画を立てました。

「震災VC」に、日本財団の尾形武寿理事長が数人の職員と共に、財団としての「緊急支援策」携えて来所されました。内容は死者・不明者の遺族・親族への慶弔金、見舞金の支給と共に、小規模組織のボランティア活動への迅速な支援が提示されています。そのため、すぐにこの情報をメールで関係のMLへアップしました。また、翌日、菅総理大臣が陸前高田市を来訪するという情報が東京の関係者より電話で入り、すぐにその場で周りに伝達しました。

2名の岩手県警の警察官が「災害VC」を訪問し、社協職員の遺体が発見されてことを告げました。そのため、同僚の女性が泣き崩れ、号泣しました。周りの私たちも、胸を塞がれる思いでした。数字で表わされる人の死が、一人ひとりの人生の軌跡であるという、当たり前の事実直面させられて、改めて愕然とする思いでした。

午後、自転車で周辺を回りました。平地が津波で被害を受けていますので、回ることが出来る地域は、坂の多い高台の地域です。スポーツタイプではない一般の自転車であるため、何度も降りて歩く程でした。これまで車で回った地域が、全体としてかなり理解できました。しかし、要所要所には自衛隊員と警察官が配置され、交通整理や支援活動を行っている風景は、決して日常の風景ではありません。目に焼き付けて、盛岡へ戻ることになりました。

陸前高田ドライビングスクール（15:00）－盛岡駅前（17:30）のバスにて、盛岡市に戻りました。相変わらず空席が多く、道も順調に走ることが出来ましたが、来る時と比べると交通量がかなり増えた感がしました。来る時には気付かなかったことですが、道程の家々は

大きく長い屋根をもつものが多く、豊かな農村部の印象を与えました。夕刻に到着した盛岡市街は、平時と変わらぬ光景でした。先程までの瓦礫の風景を思い返し、その対比に驚きを覚えました。これが、人の意識に温度差を生み出しても不思議でない、ましてや遠く離れた地では、と痛感せざるを得ませんでした。

6日目（2日）は、盛岡駅前（09:15）－東京駅日本橋口（16:15）の高速バスで東京に向かいました。来る時と同様に空席が目立ち、高速道路はきわめて順調に進めました。途中のパーキングエリアでは、週末ということもあって家族連れが目立ちました。これは、来る時とはかなり異なる風景です。今後の支援計画を議論しながら、岐路に着きました。不思議と疲労感はなく、体調を崩すこともなく、活動が出来たことが不思議な感じがします。

期間中、かなり大きな余震に何度も遭遇しました。その都度、不安を覚え身構えました。具体的な被害は出なかったようですが、今後は必ずしも同様とは言い難いものがあります。現地に行く者は、劣悪な環境からくる風邪や疲労、心理的なストレス等に加え、余震による身体的な危険がある、ということ認識しておく必要がある、と実感いたしました。

●情勢の分析と行動への提案

限定された短期間の行動でしたが、メディアの報道や阪神淡路大震災（1995年1月）での支援活動の経験を重ね、個人的な視点から状況を分析し、今後の支援についての提案を行います。しかしながら、個人的な立場からのものであることを、改めてお断りいたします。

「阪神淡路大震災」とは共通の面もありますが、多くはかなり異なっています。そのため、前回の支援の経験が、状況の判断で足枷にならぬよう、心する必要があると考えます。前回（阪神淡路大震災）と異なる今回（東日本大震災）の特徴は、以下の点と考えます。

- ①**広域である。**：東日本全域であり、被害が激しい場所でも3県にまたがっている。
- ②**沿岸地方である。**：被害が大きい三陸海岸は、幹線から離れ、文化的な繋がりが強い。
- ③**津波の被害が大きい。**：平地は家屋が消失し、被害者の数に比べて負傷者が少ない。
- ④**原発の問題がある。**：震災が延々と続き、放射能の問題が広域に影響を与えている。
- ⑤**行政や民間も経験を持つ。**：取り組みが早く組織的であるが、それゆえの課題もある。
- ⑥**IT技術の進歩が大きい。**：支援等で有効であるが、停電や通信の不通等の問題がある。それぞれについて、分析を加えてみます。

- ①**広域である。**：東日本全域であり、被害が激しい場所でも3県にまたがっている。

阪神淡路大震災は、神戸市を中心に兵庫県内の被害でした。そのため、支援の現地の拠点は神戸市に置くことが出来ました。今回は、3県にそれぞれ特徴があり、多くの組織が東北の中心である仙台市に拠点を置いています。必ずしも十分とは言えないでしょう。

- ②**沿岸地方である。**：被害が大きい三陸海岸は、幹線から離れ、文化的な繋がりが強い。

多くは、県庁所在地のから離れ、情報や物・人が届き難い。被害の地域が広いことと相まって、中央からの支援に格差が起こっています。また、歴史的にも文化的にも、地域の繋がりが強く、それが相互の助け合いの力になっています。それゆえに、その地を離れ難い状況があります。

- ③**津波の被害が大きい。**：平地は家屋が消失し、被害者の数に比べて負傷者が少ない

陸前高田市では、海際の平地は家屋の跡が存在しないくらい酷く、死者・不明が多数に上りました。多くの人が家屋を失い、家族を亡くしています。復興の支援は、物理的に生活的・精神的にも、本質的にかつ複合的に取り組むことが求められます。

- ④**原発の問題がある。**：震災が延々と続き、放射能の問題が広域に影響を与えている。

具体的な放射能への恐怖感と「風評被害」への対応が同時に求められます。国際的な支援を受けながらも、私たちに出来ることは何かを考える必要があります。また、この被害の甚大な地区（福島県）へは、民間レベルにおいても組織的で強力な取り組みが不可欠でしょう。

- ⑤**行政や民間も経験を持つ。**：取り組みが早く組織的であるが、それゆえの課題もある。

報道においても、個別のML等においても、行政や民間組織の活動は進歩したといえます。現地においても、自衛隊や警察・消防の関係機関のみならず、医療機関や関係団体の活躍は前回の比ではありません。福祉においても、(福)全国社会福祉協議会（全社協）の

要請の下、地方の社協も積極的に動き、全国規模の民間団体の動きも活発です。それゆえに、組織への依存や組織の動きの鈍さ、一部には硬直した対応の問題も指摘されています。

⑥ I T 技術の進歩が大きい。: 支援等で有効であるが、停電や通信の不通等の問題がある。

前は、「パソコン通信」と初期の携帯電話が活躍しましたが、今回はメールやツイッター等々の I T 技術が、携帯電話とともに大きな支えとなりました。しかし、現地では電気や通信が不通であったこともあり、紙での掲示やチラシが効果を発揮しました。インフラの一層の整備を期待すると共に、危機的状況における情報伝達の在り様を改めて考えさせられました。

以上の稚拙で一面的な分析に踏まえ、これからの民間レベルでの支援活動について、次のような提案をしたいと思えます。繰り返すとおり、個人の立場での思いつきに等しい内容ですが、福祉に専門的に関わる市民の一人として、義務感に駆られたく思い>をご理解いただければ幸いです。

1) <現地>に届く支援が不可欠である。

被災地を離れて避難されてきた人への支援は、きわめて重要であることは言うまでもありません。しかし、さまざまな理由から、ほとんどの方は現地に留まっています。そうであれば、<現地>に届く支援がどうしても必要です。物資やお金、情報等が全国から届いており、心強い限りです。

とともに、現地に直接出向く支援も必要ですし、それを希望する人も多くいます。特に専門職の関わりは重要です。そのために、現地のニーズを探り、橋渡し(繋ぐ)役割が必要になります。行政や全国組織と共に、民間の各種の団体やグループ等が、その役割を果たす活動が求められます。

専門家でない所謂「ボランティア (V)」は、さまざまな役割が期待されますが、個人的な参加は受け入れていない実情があります。阪神淡路大震災の支援活動の経験から、これらの個人 V の調整を図る役割の組織 (グループ) が不可欠であり、専門家の団体がそれを担うべきと考えます。

2) ピンポイントの支援が求められる。

現地への支援活動は、組織的で体系的であることが求められ、現に行政や社会福祉協議会を初めとして、各種の全国組織が取り組みを進めています。その動きを評価し、さらなる進展を期待すると共に、個人や地方組織、グループ等の独自の動きも必要であり、有効であると考えます。

しかし、それらの主体は力量が限定されるため、対象を絞り込んだ「ピンポイントの支援」である必要があります。ある「親の会」やその事業所が、現地の特定の会や事業を支える、という形式です。これは、発展途上国の支援において、欧米社会がしばしば取る方法です。

コスタリカでの海外青年協力隊の活動に接した時、小さな重症心身障害児の施設が、ドイツのある地方の教会の信者たちによって建てられ、支えられている実例を目にしました。政府レベルの援助と共に、民間の個人・グループレベルの支えは、目に見える手が触れ合える手助けです。

骨格としての行政・全国組織の公的 (フォーマル) な援助と共に、血肉としての個人や地方組織、グループの非公式 (インフォーマル) な支援活動が行われ、両者が有機的に絡み合うことによって、きめの細かいそして迅速な支援が可能で、私たちはそれを、陸前高田市の「あすなろホーム」への支援を行うことで、実践に移しました。

全国規模の鳥瞰図的な「上から」の支援と異なり、地上を這う虫の目のような「下から」の支援が、ある拠点 (ポイント) から他の拠点へ、そして広域的な地域へ広がる動きを、民間の私たちは重視したいし、期待したいと思います。「ポイント (点)」が「線 (ライン)」で繋がれ、「網 (ネット) / 面」に発展する中で、制度や公式の支援と重なり合ってくると思っています。

目に見える援助 (自分の援助は何処に届いたかが分かる支援) は、相互の関係性を深め、長期的な継続を可能にするでしょう。私はこの方式を「カップリング・サポート」と呼びたいと思えます。そのために、支援する側と支援を受ける側を繋ぐ支援も重要になって来ます。

3) 福島への支援は全国組織で対応する。

今回の震災の特異な側面は、原子力発電所の崩壊の問題です。被災地の苦悩は深く、複雑です。そのために、福島の地に集中した組織的な支援が必要だと考えます。東北の拠点として仙台（宮城県）に、行政や全国組織の現地対策本部が置かれていますが、福島への対応こそが集中されるべきです。少なくとも民間組織では、全国組織（本部）が中心になって、福島への支援に当るべきでしょう。職員の現地派遣・滞在を軸として、組織的な支援が急務だと考えます。この動きが、県外に避難されている方々へのその地での支援に連動してくる、と考えます。

4) 現地の専門家を力づける支援が必要である。

専門職団体は、個人への直接的な支援と共に、現地で奮闘されている仲間（専門職）を支えることが求められます。多くは、自からが被災しています。そのために強いストレスの中で、職務を全うするために奮闘されています。関係専門職の応援派遣を初めとして、専門職や専門機関（事業所）への支援に力を入れる必要があります。これは、すでに厚労省の要請を受けて、全国規模の組織が動いていることですが、地方組織も積極的に応じる体制が求められます。

5) 長期的な見通しの支援体制の確立を。

現地のニーズそれゆえの支援は、日々刻々と変化して行きます。それゆえに、的確なニーズの把握が必要であり、その情報を得るパイプの構築が重要です。と同時に、支援は長期間に渡ることを覚悟し、そのための体制作りが求められます。当初の熱気と異なり、時間と共に支援の力が弱まるのが考えられます。それを避ける意味でも、支援する側に体制（部門）を確立すると共に、支援が目に見える「ピンポイント支援（カップリング・サポート）」が有効と考えます。

●さいごに

報告書の完成に一週間を必要としたことは、私の無能力さに加えて、今回の「大震災」の深刻さと支援の重要性を示しています。連日の報道に加え現地での体験は、支援者である立場の私にも、大きなストレスを与えました。そのため、文章はまとまらず、いたずらに長くなってしまいました。

また、かなり個人的なことを記述し、求められないにもかかわらず各方面へ送付することは、ある種の批判が予想されます。しかしながら、歴史的な事態への専門職として、一市民としての責務の意識からのものであり、何よりも被災地の一日も早い復興を願う気持ちからであり、不遜な行動をお許しいただきたいと思ひます。自己満足の誹りは覚悟しながらも、私なりの支援活動の一つのつもりです。どうぞ、よろしく願いいたします。

社会福祉士事務所・早稲田すばいく

〒162-0051 東京都新宿区西早稲田 2-2-8 全国財団ビル5階 「JEA●東京」内

TEL/FAX. 03(5285)6817 E-mail: office@waseda-spike.jp

松友了（社会福祉士／保護司）携帯：090(3108)0358

小林良子（社会福祉士・精神保健福祉士／保護司）携帯：090(7829)6244

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行